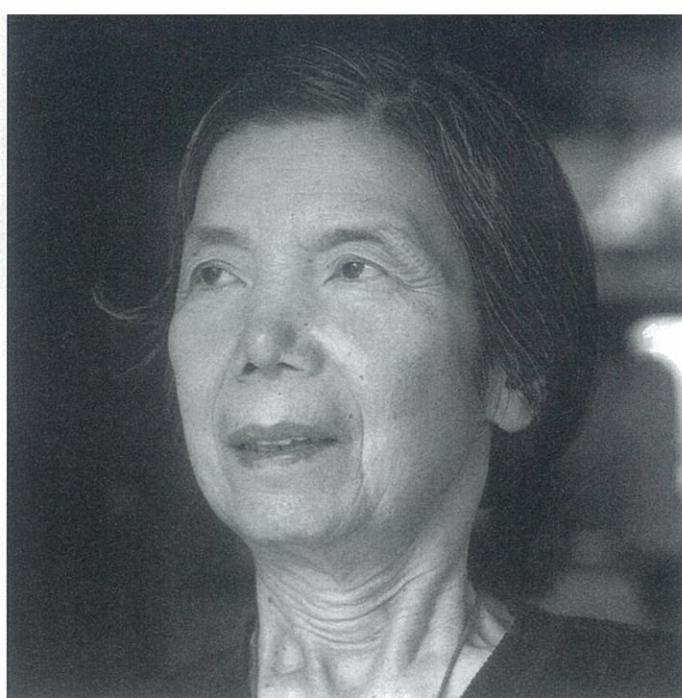


# 妻・三浦綾子が 苦難の果てに ひらいた人生

三浦綾子記念文学館館長  
**三浦光世**



みうら・みつよ——大正13年東京都生まれ。昭和2年一家で北海道に帰郷。14年小頓別小学校高等科卒業後、丸通運送入社。15年中頓別営林区署毛登別伐木事務所に検尺補助として勤務。24年洗礼を受け、キリスト者となる。34年堀田綾子と結婚。41年旭川営林局を退職後は、妻・綾子の著作活動への協力に専念。平成11年妻・綾子と死別。14年より三浦綾子記念文学館館長を務める。著書は「希望は失望に終わらず」(致知出版社)他多数。最新刊は「綾子・光世 響き合う言葉」(北海道新聞社)。



三浦綾子——みうら・あやこ

大正11年北海道生まれ。旭川市立高等学校卒業後、小学校の教員を7年務めるが、敗戦の翌年退職。同年肺結核に倒れ、13年の療養生活を送る。昭和39年、「氷点」が朝日新聞社懸賞小説に入選し、作家活動に入る。「塩狩峠」「道ありき」など多数の著作を遺し、平成9年逝去。享年77歳。

七十七年の人生を、病と信仰とともに生きた作家・三浦綾子氏。その過酷な人生体験から紡ぎ出された多くの作品は、没後十年がたとうとしているいまなお、多くの人々の心に希望と感動を与え続ける。夫として四十年にわたり支え続けた光世氏に、艱難辛苦の人生の歩み、その果てに摺んだ氏の境地についてお話しいただいた。

## 代表作『塩狩峠』 誕生の秘話

家内の綾子が亡くなって、十年が過ぎようとしています。互に体が弱かったこともあり、おそろく同じくらいに死ぬのではないかと思っていました。予想外に私はもう十年もあとを一人で生きてきました。この間、綾子との思い出を書いてほしいという要望も多く、何だかんだと忙しくしてきた十年でもありました。

ありがたいことに、いまでも綾子の本を読んだと言って、旭川の自宅を訪ねてくださる方もあります。

いまから三、四年前だったでしょうか。やはり一人の青年が自宅を訪ねて来られ、「三浦先生の本を読んで、僕は自殺を思いとどまりました」とおっしゃってくださいました。それは天国の綾子にとっては何よりの喜びであり、私にとっても大きな言葉でした。

この方がお読みになったのは、確か『塩狩峠』とおっしゃっていました。実はこの小説を書くことになったきっかけは、とても不思議なご縁でありました。「デビュー作となった『氷点』が発表される少し前のことです。その日は礼拝の後、近くにある公園に行き、思い思いに輪となり、「愛とは」「神とは」「救いとは」など皆で話し合いました。

綾子と私は違うグループで、彼女は司会者を務めたとのことでした。帰宅後、互いの話し合いを報告し合った時、ふと「ただ、一人自分だけ話したがるお年寄りの方が出て、その人をセーブするのに苦心したの」と綾子が言いました。

「まあ、年を取ったら、そういうこともあるだろう」と、私は答えました。

翌週、教会に行くと、川谷牧師から「綾子さん、藤原さんから手紙が来ているから、読んでみてください」と一通の手紙を差し出されました。藤原栄吉と署名されたその手紙は、先週綾子と同じグループで話をセーブするのに苦心したという、お年寄りから寄せられたものでした。そこには、

「あの三浦綾子というのは何者ですか。私が発言しようとするたびに遮って、邪魔をして、物言わせないようにしていると思えなかつた。ああいう女性とは今後同席を認めんこうむりたい」と、痛烈な批判が認められていたのです。

## 叩きのめされるような 深い感動を覚えて

「冗談じゃないわ。私こそ同席したくないわ」

世の中にはそう捉えて腹を立てる人もいます。しかし綾子にはそういう発想はありませんでした。

「あらあ、大変！ 私すぐに藤原

さんにお詫びに行かなければいけないわ。川谷先生、ご一緒していただけませんか」

私たちは三人で藤原さんのお宅を訪ねました。玄関先で何度も何度もお詫びをするうち、家に上げていただき、そこでも綾子は何度も頭を下げました。

ふと、藤原さんの文机に目をやると、そこには原稿用紙の束が置いてありました。

「あら、藤原さん、何かお書きですか？」と綾子が尋ねると、途端に藤原さんの顔が輝いて、

「明治末期、私の国鉄の直属の上司に長野政雄という人がおりました。塩狩峠で自分の身を挺して乗客の命を救ったのです。その方のことを書いています」

とおっしゃったのです。

塩狩峠(北海道和寒町)は天塩と石狩の境にある険しく大きな峠で、古くは交通の難所として知られていました。明治四十二年二月二十八日の夜、急坂を登りつめた列車の最後尾の連結器が外れ、逆走し始めました。その日、たまたま乗客として乗り合わせていた鉄道職員の長野政雄氏とつさの判断で線路に身を投げ出し、自分の

体で客車を止めました。長野氏は殉職、そして乗客は皆救われたのです。

クリスマスチャンだった長野氏は、毎年元旦に遺書を書き改め、肌身離さず持っていたといわれています。

「余は諸兄弟が、余の永眠によりて、天父(神)に近づき、感謝の真義を味ははれんことを祈る」

亡くなったその時、この一節が書いてある遺書が懐中から出てきたそうです。

この日の藤原さんの話を聞き、綾子は深い感動を覚えたようでした。その時のことを、後に『塩狩峠』のあとがきに「叩きのめされたような深く激しい感動」と記しています。

その後、自ら教会の月報等の資料に当たり、「純金の生涯」「愛の権化」と称えられた長野氏の人柄や信仰への真摯な姿勢を知るにつけ、いよいよ創作意欲をかきたてられたようでした。

出会いから数か月後、綾子は藤原さんに「私も長野さんの生涯を書いてほしいでしようか」と頼みに行きました。その時には既に『氷点』によって綾子も作家として知られる存在となり、また、